

〔報告〕

過疎地域に居住する高齢者の「通い家族」の現状と支援のあり方

米 増 直 美 松 下 光 子

Support from Separated Family to Older People
who Live in Rural and Depopulated Area

Naomi Yonemasu, Mitsuko Matsushita

Ⅰ. 研究目的

山間地域で暮らす高齢者世帯の生活実態について調査^{1, 2)}したところ、高齢者の居住地外に住む子どもたちが高齢者宅に通い、日常生活面でのサポートしている実態があることが分かった。高齢者の居住地外に住む子どもたちは、高齢者の「別居家族」であるが、通いながら日常生活支援をしている状況から、筆者らは「通い家族」と呼ぶこととした。そして、「通い家族を支える支援のあり方」について検討を深めてきた²⁾。

本研究では、その際に必要と考えられた「通い家族を支援する内容」について、高齢者世帯の通い家族に提示し、当事者の立場からの意見を求めることにより、通い家族が抱えている課題を明らかにし、必要な支援をより具体的に検討する。なお、本研究では、過疎地域の地域医療・看護を担っている過疎地域診療所の専門職として通い家族を支援していく方法を検討する。町村合併により保健師の配置が変化し、過疎地域に暮らす人々と行政の保健・医療・福祉に関わる専門職との物理的距離が遠くなり、住民にとっては専門職による支援が受けにくくなってきている状況がある。そのような状況下において過疎地域診療所は、住民にとっての身近な保健・医療・福祉サービスの総合窓口としての役割も担っており、過疎地域のケア体制作りの拠点にもなると考える。本研究により、過疎地域における通い家族も含めた高齢者支援を総合的に推進していく対策を検討することができる。

Ⅱ. 方法

1. 調査方法

質問紙調査を実施する。質問紙回答は調査参加者による自記式とし、回収は、郵送による返信とする。

2. 調査対象および実施場所

先行研究で一定地域の高齢者世帯の全数調査を実施した地域¹⁾において、当該地域のA診療所の協力を得て調査を行うことにした。A診療所は、旧A村の地域医療・看護の拠点として、診療活動だけでなく、地域ケア会議の運営の中心となり、高齢者の生活実態を幅広く捉え、予防的な活動も実施している。旧A村の人口は約1,300人、高齢化率は約35%であり、人口は減少傾向にある。高齢者が多く、過疎化がすすんでいるこの地域では、村外に居住する別居の家族、すなわち「通い家族」が高齢者の介護や生活をサポートしている実態がある。しかし、これらの通い家族とは通常の診療所活動では接点を持ちにくいと、診療所としてどのように通い家族の支援をしたらよいのかわからないという課題を持っていた。そこで、本調査により通い家族による高齢者サポートの実態と通い家族が抱える困難や悩みを理解し、支援の方向性を探ることができると考え、本調査への協力を得ることができた。

対象は、A診療所で把握している、75歳以上の高齢者世帯の通い家族を対象とする。あらかじめ診療所で把握している75歳以上の高齢者世帯をリストアップする。

そして、リストアップされた高齢者に、診療所の看護師または医師から、通い家族の有無を尋ね、通い家族がいる場合には、質問紙を配布し、高齢者から通い家族に質問紙を渡してもらえよう協力を依頼する。

3. 調査時期

家族が帰省すると思われる時期を選定し、質問紙の配布および回収を、平成19年7月～9月とした。

4. 倫理的配慮

まず、調査の目的および倫理的配慮について高齢者へ説明する。さらに通い家族の有無も確認し、通い家族が有りの場合は、調査への協力を依頼する。そして、高齢者が通い家族に質問紙を渡すことができるかどうか確認し、渡すことが困難である場合は、質問紙は渡さないこととした。研究参加者、すなわち通い家族へは、文書で本研究の目的と研究参加は強制ではないこと、無記名であり個人が特定されることはないこと、個人や地域名が特定されないように集計し学会等で研究報告を実施することを説明し、質問紙の返送をもって研究参加の意思を確認した。なお本研究は、岐阜県立看護大学研究倫理審査部会です承を得て行った。

5. 調査項目

一高齢者世帯に対し、通い家族は複数名いると思われるが、今回はそのうち1名に代表で回答してもらうことにした。

1) 高齢者世帯に関する基本属性：世帯構成および高齢者の年代。

2) 通い家族の基本的属性およびサポート内容：続柄、通いの頻度、通いの距離、サポートの内容。通いの頻度、通いの距離、サポート内容は該当するものを選択するこ

とにより回答を得た。尚、回答者の他にも通い家族がいると思われるので、回答者が分かる範囲で、他の通い家族の基本属性およびサポートの内容を記入してもらえよう、5名まで書けるように欄を設けた。

3) 高齢者サポートの現状：①高齢者サポートにおいて困っていること・心配していること、②高齢者をサポートする上で自分なりに心がけていること、③通い家族として助けになること。①～③については、先行研究の結果および考察により得た内容²⁾を選択肢として示し、該当する内容を複数回答で得た。さらに選択肢以外に自由記載欄も設けた。

4) 通い家族自身が高齢者の住む地域に対してできること：地域に対してできることの有無を尋ね、有る場合は、内容を選択肢から複数回答で回答を得た。

5) 高齢者サポートに関する自由意見：記述により回答を得た。

III. 結果

1. 質問紙配布・回収結果および高齢者世帯の状況

調査期間中に高齢者世帯86件（独居世帯43件、高齢者複数世帯43件）へ調査依頼および質問紙配布ができた。そして、58件の通い家族から返送があり、すべて集計の対象とした。回収率67.4%であった。

通い家族がサポートしている高齢者世帯の構成は、独居世帯が31件、高齢者複数世帯が27件であった。高齢者複数世帯の構成は、夫婦が25件、その他が2件で、その他の内訳は、親子、きょうだいの世帯であった。独居世帯の性別および年齢構成、高齢者夫婦世帯の夫・妻の年齢構成は、表1、表2に示すとおりである。

表1 独居世帯の性別および年齢構成

N=31 (人)

性別	年齢階級				計
	75-79 歳	80-84 歳	85-89 歳	90-94 歳	
男性		1	1	1	4
女性	3	12	5	2	24
不明				3	3

表2 高齢者夫婦世帯の夫・妻の年齢構成

N=25 世帯 (人)

	75 歳未満	75-79 歳	80-84 歳	85-89 歳	90-94 歳	不明	計
夫の年齢	1	9	6	8	1		25
妻の年齢	5	11	7	1		1	25

2. 通い家族の基本的属性およびサポートの内容

質問紙1件につき、1名～5名の通い家族の状況の記載があり、合計89名の通い家族の実態が把握できた。記載で「娘夫婦」「長男夫婦」と書かれていたものは、後続の質問への回答が夫婦それぞれの回答ではなかったため、集計上1名として処理することとした。

1) 通い家族の続柄

続柄の欄を自由記載にしたため、多様な記載があり、表3に示す結果となった。ほとんどが実子と思われる子どもで、性別は、特定できる範囲では男性40名、女性31名であった。

2) 通いの距離および頻度

通いの距離を、車での所要時間で尋ねた結果を表4に示す。「30分から1時間30分」が最も多く、49件であった。そして、通いの頻度の結果を表5に示す。表5の表側は、頻度の高い方から順に示している。週2～3回から月1回の頻度で通っている者が多い。通いの距離で4時間、8時間と回答した者は、頻度はそれぞれ、年3回、年1回と回答していた。

表3 通い家族の続柄 N=89

続柄等	人数
長男	26
長女	18
次男	11
次女	7
子供	6
嫁・長男の妻	6
娘	5
三男	1
四男	1
息子	1
三女	1
孫	1
弟	1
娘夫婦	1
長男夫婦	1
不明	2

表4 通いの距離 N=89

時間	人数
30分以内	27
30分-1時間半	49
1時間半以上	4
2時間	2
4時間	1
8時間	1
不明	5

表5 通いの頻度 N=89

頻度	人数
毎日	1
週2・3回	13
週1・2回	1
週1回	19
月3回	1
月2回	13
隔週	1
2～3週間に1回	1
月1回	28
2ヶ月に1回	2
2～3ヶ月に1回	1
年4回	1
年3回	2
6ヶ月に1回	1
年1回	1
都合のつくとき	2
不明	1

表6 サポートしていること（複数回答）N=89

内容	人数
買い物手伝い	43
冠婚葬祭手伝い	35
農作業	31
掃除	27
食事作り	23
草取り	13
地区の仕事	13
受診送迎	11
洗濯	10
その他	13

3) サポートの内容

通い家族がサポートしていることを表6に示す。「買い物手伝い」等の家事・日常生活支援や、「冠婚葬祭手伝い」「地区の仕事」等、高齢者が住むコミュニティでの役割を高齢者の代わりに担っていた。その他の内容は、「安否確認」「郵便物・書類の整理」「家の中の細かいこと」「身体の様子を見る」「つきあい」「老人保健施設への送迎」「入浴手伝い」等の記載があり、日常生活の様々なことをサポートしていた。

3. 通い家族による高齢者サポートの現状

1) 高齢者サポートにおいて困っていること・心配していること

表7に示す結果を得た。独居世帯と高齢者複数世帯を比較すると、「一人でいるときに倒れていたらと心配」と答えた割合が、独居世帯の方が多い。次いで、「悪質業者の被害の心配」が多かった。その他自由記載では、「火の始末が心配」「今後、要介護になったときが心配」「老

老介護による介護者の健康の心配」等、高齢者介護に関する心配事の記載があった。また、「地区の仕事に高齢者の代わりに出席することの負担」についても記載があった。質問紙では「自分の家族の健康に不安がある」という選択肢も設けていたが、回答者は0件であった。また、「特になし」の回答は、独居世帯4件、高齢者複数世帯5件、計9件であった。

2) 高齢者サポートにおいて心がけていること・工夫していること

表8に示す結果を得た。「近所の人に会ったときには挨拶するようにしている」や、高齢者および親戚と連絡を取りやすい体制を整えるような工夫がなされていた。その他自由記載では、「近所の人をお願いしている」「時間がとれる限り行って話を聞くようにしている」「決まった時間に携帯電話に電話する」等の記述があった。また、また、「特になし」の回答は、独居世帯・高齢者世帯そ

れぞれ1件ずつ、計2件であった。

3) 通い家族として助けになること

表9の表側に示す内容は、先行研究²⁾で検討した通い家族への必要な支援内容である。この10項目について、通い家族として助けになるものはどれか、複数回答で尋ねたところ、表9に示す結果を得た。「近所の人による高齢者のみ世帯の見守りや声かけ」が最も多く、次いで高齢者支援に関する相談や助言や、情報提供であった。その他自由記載では、「近隣者の見守りはありがたい。しかし、近隣者も高齢化しており今後は不安である」「巡回してくれる専門職がいると安心」等の意見があった。

4. 通い家族が高齢者の住む地域に対してできること

通い家族自身が、高齢者の住む地域のためにできることの有無を尋ねたところ、30名が何らかのことができると回答し、その内容は表10に示す。当該地域では冬期に積雪があり、多くの高齢者が除雪に困っている状況

表7 高齢者サポートにおいて困っていること・心配していること（複数回答）

内容	人数		
	独居世帯 (N=31)	高齢者複数世帯 (N=27)	計 (N=58)
ひとりであるときに倒れていたら心配	25	12	37
訪問販売など悪質業者の被害にあわないかと心配	18	13	31
気持ちの上での負担が大きい	6	5	11
自分自身の健康に不安がある	4	1	5
何かあったときにどこに相談したらよいかわからない	2	1	3
経済的な負担が大きい	0	1	1

表8 高齢者サポートにおいて心がけていること・工夫していること（複数回答）

内容	人数		
	独居世帯 (N=31)	高齢者複数世帯 (N=27)	計 (N=58)
近所の人に会ったときには挨拶するようにしている	23	17	40
家族・親族の中で連絡がとりやすいようにしている	15	20	35
高齢者自身が緊急時に自分のところに連絡ができるようにしている	20	12	32
家族・親族の中で話し合う	8	8	16
高齢者の健康や介護に関するいろいろな情報を得るようにする	4	7	11
専門的な人に相談する	4	5	9

表9 通い家族として助けになること

内容	N=58	
	人数	
近所の人による高齢者のみ世帯の見守りや声かけ	30	
支えている高齢者への支援（介護や生活のサポートなど）に関する相談や助言	17	
高齢者の住む地域にある高齢者支援サービスの情報を家族に知らせる	16	
近所の人による高齢者のみ世帯の日々の生活への支援（ゴミだし、買い物手伝いなど）	10	
高齢者への支援に関する相談窓口を通してきている家族に知らせる	8	
通ってきている家族員自身の健康についての相談や助言	5	
高齢者宅に通ってくる交通費の補助	4	
通ってきている家族員の家族の健康についての相談や助言	3	
高齢者の住む地域で高齢者を通して支える家族が集まって情報交換する機会をつくる	3	
通ってくる家族自身の住む地域で高齢者を通して支える家族が集まって情報交換する場をつくる	2	

があるが、通い家族が手伝えることとして「雪かき」との回答が最も多かった。次いで「近隣者の手伝い」「農作業」が多く、その他自由記載では、「高齢者の住む地域でできない代わりに、自分の地域でボランティアをしている」「仕事に余裕ができたらできる限りやりたい」という意見もあった。

表 10 通い家族が高齢者の住む地域に対してできること N=58

内容	人数
雪かき	19
近隣者の手伝い	14
農作業（田畑の世話）	12
地区の運動会や祭りの運営・参加	9
地区の役員	1

5. 高齢者サポートに関する自由意見

18名から、コメントや意見の記述があった。代表的なものを表 11 に示す。「地域で支えること」に関しては、実際に近隣者や地域の専門職に支えられている現状と、地域で支えて欲しいという要望、そして地域で支えることの限界への心配等が挙がっていた。その他に、サービス等に関する要望や、今後の不安、課題が大きいこと等が述べられていた。

IV. 考察

1. 通い家族による高齢者サポートの現状

今回の調査対象地域では、通い家族の多くは子どもたちで、30分から1時間かけて通っている実態がわかった。通う頻度としては、週2～3回の頻度から月1回等、それぞれの状況にあわせて通っていると思われる。サ

ポートの内容としては、「買い物手伝い」が多く、買い物の場所が遠い山間地域においては不可欠なサポートである。次いで「冠婚葬祭手伝い」「農作業」が多く、いずれも高齢者自身が困難になってきた居住地域内での役割や、仕事を子どもたちがサポートしている。これらはこの地域の風習や産業を引き継いでいく役割を子どもたちが担っている実態である。

今回の調査では高齢者の健康状態を調べていないため、介護が必要な状態であるかどうかは不明であるが、通い家族がサポートしている内容から、特に介護というわけではなく日常生活の家事等のサポートをしている実態である。保健医療専門職が高齢者に関わる時は、要介護高齢者の支援に関することが多いが、通い家族は介護の要否にかかわらず、高齢者の日常生活全般をサポートしており、これらのサポートがないと、高齢者が山間地域で暮らすことは困難になる。高齢者が要介護になった場合、「買い物」「掃除」「食事作り」等は、公的な介護保険サービスとしてホームヘルパーによる家事援助でサポートできる部分もあるが、コミュニティの中の役割である「冠婚葬祭手伝い」「地区の仕事」やその家の「農作業」は、介護保険サービスで補えるものではない。高齢者の住み慣れた地域での生活を維持するには、通い家族によるサポートが非常に重要であることをあらためて確認できた。専門職が要介護高齢者の支援にかかわるときも、通い家族は、単に身体介護に関わるだけでなく、高齢者が住むコミュニティの中の役割も担っていることを意識し、支援していくことが必要になる。

表 11 高齢者サポートに関する意見（自由記載）

カテゴリ	具体的記述内容
地域で支えることに関する意見	
地域で支えて欲しい	家族だけで支えるのは難しい為、地域で支えて欲しい。
地域で支えてもらっている	県外在住で、兄弟で出来るだけ帰ってくる様にはしている。区長さんはじめ近所の皆様には親切にさせていただいており大変有難く思っている。
専門職で支えてもらっている	各家庭によって、ライフスタイルも違い、なかなか心の底から近くの人達にお話できない事もある。現在、親族、ケアマネジャーさん、ヘルパーさんで支えて頂いている。
地域で支えるのも限界	地域で支える事はひとつの方法と思うが、近隣の方々も高齢化している状況では、限界がある。
サービスや制度の希望	
もしもの時、緊急時の対応策	今は家族全員で何かあればすぐ電話し合える様にしています。しかし、片方に何かあった時は心配です。近所にも高齢者が多く、もしもの時の対応の具体策は欲しい。
サービスの希望	冬期にショートステイとして利用できる高齢者住宅等の整備。地域で生活するというのに、昼、夕の配食サービス希望。
今後のことを考えると不安 課題が大きい	今の所、元気に暮らしておりますが、今後の事を考えると不安です。親族と話をする時かと思っている。町村合併による行政の体制変化、医療の進歩、子供の数、子供の住んでいる場所等、個人で解決できない事が余りにも多い。

2. 通い家族への支援のあり方

1) 近隣者による見守り体制づくり

先行研究²⁾において、近隣者による見守り・支え合いが必要であることが考えられた。本調査では、通い家族が心配していることとして、「ひとりでいるときに倒れていたら心配」「悪質業者の被害にあわないかと心配」が多く、身近ですぐに対応できない通い家族であるが故の心配事であった。これらへの対策としては、通い家族が助けになることとして多くあげている「近所の人による高齢者のみ世帯の見守りや声かけ」「近所の人による高齢者のみ世帯の日々の生活への支援」が考えられ、先行研究と同様、近隣者同士での見守り体制づくりが必要であると言える。自由記載の内容から、通い家族も「近隣者に協力を得たい」、「協力を得ざるを得ない」という気持ちを持っていることが推測され、実際に「近所の人に会ったときには挨拶するようにしている」など、近隣の協力が得られるよう努力している。さらに、自分自身が高齢者の住む地域に貢献できることとして、「近隣者の手伝い」と回答した者もあり、通い家族自身が地域の支援者として期待できる。しかし、一方では、地域全体が高齢化のため、支えることができる人々が限られているという問題がある。このような現状も踏まえた上で、限られた人的資源の中で、通い家族自身の力も得ながら、高齢者の住む地域での見守り体制を構築することが課題である。

2) ケアマネジャーや看護職等専門職の役割

先行研究²⁾において専門職の役割としては、住民に相談窓口を知らせ相談につなげること、通い家族の相談に乗ること等を考えた。本調査結果に照らし合わせると、通い家族の要望としても「高齢者の支援に関する相談や助言」「サービス情報の周知」「相談窓口を知らせる」が多く、やはり、専門的な相談支援や、サービスや制度の周知等の役割が求められていると言える。

通い家族の支援の方法として、通い家族同士が集まって情報交換をする機会をつくることも考えたが、要望としては少なかった。30分～1時間半という時間をかけて通い、日常生活面のサポートから地域での役割も担う中で、集まって情報交換するのは時間的にも厳しい状況であると思われた。また、先行研究においては、介護のために通っていた家族の健康状態が悪化した事例があり、

通い家族への健康支援が必要と考えた。本調査では、通い家族自身で健康に不安がある者や、通い家族への健康に関する相談・助言を必要と回答した者は少なく、多くの通い介護者は、現状では健康面には問題なく過ごしていると思われる。しかし、健康面には予防的にかかわることが重要であり、特に今不安を抱えている者に対しては、早期対応が必要である。そのためには、高齢者自身が要介護状態でなくても、介護予防の面から働きかけると同様、通い家族の健康状態の把握も行い、健康面での支援が必要である。

3) 公的支援の必要性の検討

先行研究²⁾では、県外から有料道路を活用して通う事例があり、経済的な負担があったため、公的支援として通い家族への交通費補助が必要ではないかと考えた。しかし、本調査の結果では、交通費補助の要望は少なかった。調査地域では、30分～1時間半程度の距離の者が多かったため、負担の度合いが高くないのかもしれない。また、公的支援としての財源については検討していないため、非現実的なプランであった。さらに実態や、通い家族の負担感を詳細に調べる必要がある。

V. まとめ

過疎地域で暮らす高齢者の家に通って世話をしている家族を「通い家族」と定義し、先行研究で検討した通い家族への支援のあり方を、通い家族の意見を聞き、さらに具体的に検討した。高齢者の住む地域において近隣者による見守り体制づくりが必要で、地域全体が高齢化している現状ではあるが、通い家族の助力も得ることを視野に入れ、方策を検討する必要がある。また、専門職の役割としては、高齢者の支援に関する相談や助言、相談窓口やサービスの周知が求められている。通い家族への健康支援は現状においては要望としては少なかったが、健康面の支援は予防的にかかわる必要があるため、高齢者と同様、通い家族への健康面にも気を配ることが必要と考えた。

謝辞

本研究にご協力いただきました高齢者の皆様、研究参加者の皆様、診療所スタッフの皆様に深く感謝いたします。

文献

- 1) 米増直美, 松下光子: 過疎地域における高齢者世帯の健康生活を支える外部支援資源の現状, 日本地域看護学会第10回学術集会講演集; 186, 2007.
- 2) 松下光子, 米増直美, 大井靖子: 過疎地域に暮らす高齢者世帯への別居の子どもによる通い介護の現状と必要な支援の検討, 日本地域看護学会誌, 10(1); 106-112, 2007.

(受稿日 平成 20 年 11 月 10 日)

(採用日 平成 21 年 1 月 28 日)